和鍛冶開封刀

ペーパーナイフ

田中鎌工業

道具にこだわる人に使ってほしい
切れ味バツグンの一本

松原刃物は、壇の浦の合戦で破れた平氏の名工の子孫が、現在の大村市の松原に住み着き、刀を作り始めたのが起源と言われ、約五百年の歴史を持つ。松原刃物の特徴は、なんといっても切れ味の良さ。田中勝人さんが作る「和鍛冶開封刀」と名付けられたペーパーナイフは、気持ち良いくらいにスーッと紙が切れる。その切れ味は、想像を超える鋭さ。しかし最高の切れ味ながら「床に落ちても、足を傷つけることはありません」と、安全性に配慮している点はさすがだ。

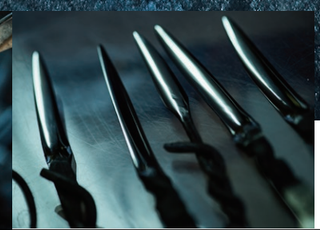
追求したのは色。「刃の部分は鏡のように、持ち手は鉄本来の黒を活かしたかった」と言うが、この黒色を出すのが難しいという。"格好いい"を演出する光沢を抑えたマットな質感の黒を実現するためのベストな温度は千五十度。それよりも低いと同じ黒は出ず、高いと表面が酸化するのだという。また、制作過程で少しでも持ち手の部分に傷が付いてしまうと商品にならないため、細心の注意を払わねばならない。

独特のフォルムも印象的だ。フォルムのデザイン画は存在せず、一発勝負で作り上げるという。「こうしてみたらどうだろう、ああしてみたらどうだろう…と、一瞬で作り上げていくんです」と田中さん。そうして生み出したパターンは約三十種。中にはロープを結んだような独特のフォルムも見られる。

ペーパーナイフには、松原刃物の技術がふんだんに取り込まれている。田中さんは「実はこのペーパーナイフは、大事な手紙や書類が錆びないように、ステンレスでできています。ステンレスは、プレス加工を用いれば製品の大量生産が可能となる材料ですが、それをあえて焼いたりたたいたりして、一本一本手作りしているんです」。田中さんの言葉には、五百年以上にわたって培われた技術を継承する鍛冶職人としての誇りがあった。

見事な切れ味で、すっきりと開封することができる。

デザインはいろいろです。ピッタリの1本を見つけてください。

田中勝人さん

1962年、大村市生まれ。1933年創業の「田中鎌工業」の四代目。20歳からこの道に入り、松原刃物の技術を継承している。家庭用の包丁をはじめ、それぞれの職人に合わせた道具を作り続けている。